

武蔵野

ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ

中島飛行機

かつて、現在のグリーンパーク一帯にも工場を有していた日本有数の航空機メーカー、中島飛行機。戦争の時代の28年間に存在したこの会社の歴史とその後をたどってみました。



大正8年に完成した、中島飛行機の出世機といわれる「四型6号機」

ライト兄弟の偉業を知り 飛行機の将来性を確信

中島飛行機の創業者・中島知久平^{ちくへい}は、海軍機関学校卒業後、海軍に入りますが、その時すでに船よりも飛行機に強い関心を抱いていました。彼が機関学校に入学した明治36年に、ライト兄弟が初飛行に成功。その将来性に心を奪われたのです。

当時、飛行機の性能は貧弱で、飛行機が有用なものになるなどと考えられる者はほとんどいませんでした。そんな中、中島は早くから飛行機の価値を高く評価し、研究を進めていました。海軍大学の選科学生となった彼は、海軍航空術研究委員会に参加。アメリカに渡り、日本人で3番目となる「飛行士免状」を取得します。中島の心の中で「これからは飛行機が必ず国防の主役になる」という確信は日に日に強まっていきまししたが、海軍では飛行機を活用しようという動きが広がることはありません



海軍大学時代の中島知久平。後に政治の道へと進み、近衛文麿内閣では鉄道大臣を務めた。

んでした。そんな状況に業を煮やした中島は「軍にとどまるよりも、民間で航空機事業を立ち上げるほうが効率的」との考えから、大正6年に海軍を退役し、故郷の群馬県尾島町（現・太田市）に「飛行機研究所」を設立します。これが中島飛行機の始まりです。

中島はまず、機体の製作に取り掛かりました。失敗を重ねた後にアメリカ製エンジンを搭載した四型でようやく満足いく製品を作り上げました。その性能の高さが評価されて大正8年に陸軍から、初の日本人設計による量産機となった「中島式五型複葉機」20機を初受注。「中島飛行機製作所」と改称していた飛行機工場は、本格的な生産を開始。さらに大正14年には、東京府豊多摩郡井荻町（現・杉並区桃井）の青梅街道沿いに東京進出第一号となる東京工場を設置し、エンジンの本格生産も始まりました。

主力工場だった武蔵製作所が 米軍の最重点爆撃目標に

事業を軌道に乗せたところで、中島は政治家に転身します。昭和5年に衆議院議員に初当選した彼は、後に近衛内閣と東久邇内閣で閣僚を務

めることになりました。

中島が社長を辞した頃から、国際情勢は騒然とした気配を漂わせていました。日本では戦闘機の生産を強化するため、各社に競争試作をさせるようになりました。昭和16年には「隼（はやぶさ）」の名で知られる一式戦闘機、19年には「疾風（はやて）」と呼ばれる四式戦闘機と、中島飛行機製の戦闘機が制式採用されました。

こうして、陸軍の主力戦闘機は、中島飛行機が生産を担うことになりました。海軍では三菱重工の九六式艦上戦闘機が制式採用され、昭和15年から「ゼロ戦」と零式艦上戦闘機が主力戦闘機となります。このゼロ戦が搭載していたエンジンも中島飛行機製でした。さらに中島飛行機は機体のライセンス生産も行い、全国で計1万425機生産されたゼロ戦のうち、6割以上を占める6545機を生産していました。また、さらなる先進技術の研究機関として、昭和16年には200万㎡という広大な用地を確保して、三鷹研究所を起工しました。

昭和18年、いずれも当時の武蔵野町にあった武蔵野製作所と多摩製作所の統合によって生まれた武蔵製作所は、海軍用の西工場、陸軍用の東

工場、病院、その他の附属施設から成っており、主にエンジンの生産を行う拠点でした。最盛期には、従来からの従業員に日本全国からの徴用工員、男女動員学徒を加え、その総数5万人におよぶ国内最大の航空発動機工場となっていました。

その後、戦況が悪化すると、最重要軍需拠点であった武蔵製作所は米軍の重点爆撃目標となり、昭和19年11月24日の空襲以来、終戦までに9回の爆撃が行われ、武蔵製作所は壊滅状態となりました。武蔵野市では、米軍の初空襲を受けたこの日、11月24日を「武蔵野市平和の日」に制定し、戦争の悲惨さや平和の尊さを後世に伝える取り組みを行っています。

中島飛行機の高度な技術力が戦後日本の自動車技術を牽引

戦争が終わると、軍需工場である中島飛行機は生産を中止しました。もともとB29の爆撃によって工場は破壊し尽くされており、生産能力はほとんどないに等しい状態でした。中島飛行機は、終戦の翌日には定款を変更して「富士産業株式会社」と改称し、平和産業への転換を模索します。しかし、GHQから4大財閥

に準ずるものとして解体命令を受け、解散を余儀なくされました。戦争の時代に生まれ、兵器となる航空機を生産しましたが、中島飛行機の中で培った高い技術力は、戦後、自動車産業で大きく花開くこととなります。昭和28年に誕生した、自動車ブランドのサブドレ知ら



武蔵製作所跡地は、現在は都立武蔵野中央公園（はらっぱ公園）や市役所となっている。



昭和18年11月の完成当時、最新鋭のシステムを導入していた工場「武蔵製作所」



富士自動車工業（後の富士重工業）で、昭和29年に開発された「P-1」1号車。ボディには航空機技術を応用し、軽量化と耐久性が追求されている。

れる富士重工業は、中島飛行機が離合集散を重ねた末にたどり着いた姿です。後に日産自動車となるプリンス自動車工業も、中島飛行機の技術者たちが多く参加して誕生した会社です。奇跡的に大きな空襲被害を逃れた東京工場はその後、日産自動車荻窪工場へと変遷を迫りましたが、現在は区立桃井原っぱ公園になっています。三鷹研究所は、空襲を受け、跡地は富士重工業東京事務所、国際基督教大学、都立野川公園などとなりました。

武蔵製作所は閉鎖され、跡地は、電気通信省（現・NTT武蔵野研究

開発センター）、東京スタジアムグリーンプーク球場（閉鎖後、主に公団住宅）と姿を変えていきました。米軍宿舎になったエリアもありましたが、市を挙げて返還運動が展開され、昭和48年に返還が実現。現在は、都立武蔵野中央公園や市役所となっています。

中島飛行機の略歴

- 大正 6 (1917) 年 中島知久平33歳のとき、群馬県尾島町前小屋に「飛行機研究所」設立
- 大正 7 (1918) 年 「中島飛行機製作所」と改称
- 大正 8 (1919) 年 陸軍から初の日本人設計の量産機となった「中島式五型複葉機」20機を初受注
- 大正 12 (1923) 年 陸軍甲式四型戦闘機の生産開始
- 大正 14 (1925) 年 東京府豊多摩郡井荻町に東京工場完成、エンジン本格生産開始
- 昭和 6 (1931) 年 「中島飛行機株式会社」と改称
- 昭和 13 (1938) 年 陸軍専用の武蔵野製作所完成
- 昭和 16 (1941) 年 海軍専用の多摩製作所完成。第二次世界大戦開戦
- 昭和 18 (1943) 年 武蔵野製作所・多摩製作所を統合し「武蔵製作所」が発足
- 昭和 19 (1944) 年 武蔵製作所、米軍の空襲爆撃を受ける。三鷹研究所新設
- 昭和 20 (1945) 年 終戦、航空機生産停止命令。「富士産業株式会社」と改称するも財閥解体指令を受ける